



旗頭を先頭に出演者総出で字内を練り歩く道ズネー



昨年発行された
志多伯の獅子加那志豊年祭の教本とDVD

兵器を覆い隠すための網を材料にするなどの苦労もあったそうです。「家族を戦争で失い、希望を失っていた時期だったからこそ、心の拠り所として獅子舞や祭りが重要な位置づけにあったのではないかと神谷さん。

昨年は獅子加那志が甦ってから戦後2巡目の三十三年忌にあたり、特に盛大に豊年祭が行われました。朝の拝みからはじまり、昼には旗頭を先頭に神獅子を字内で舞わせながら練り歩く「道ズネー」を経て、夜の舞台までを二夜連続で開催。獅子舞や棒術、舞台の組踊や狂言、芝居には字の子ども会や青年会、婦人会や老人会、総勢200名以上が出演しました。

スピード感あふれる激しい動きが持ち味の志多伯の獅子舞は、演

舞の途中で前足役と後ろ足役が瞬時に入れ替わったり、後ろ足役の膝上に前足役が立ち上がる大技や、空手の型を用いた独特の舞などが特徴。そのすべてが志多伯で世代から世代へと大切に受け継がれてきました。

「豊年祭は年忌にしか開催されないため、当時の出演者の記憶が薄れていたり、映像や文献による資料がほとんどない状態。その中で祭りの継承は本当に大変です」と神谷さん。素晴らしい伝統文化を何とか形に残そうと、平成22年度から23年度にかけて国や県、町の文化助成事業を受託。国から200万円、沖縄県から250万円、八重瀬町から100万円の補助を

「地域文化への誇りこそが 「地域文化力」

復活・再生にかける オキナワンスピリッツ ―情熱―

沖縄に伝わる独自の文化や風習、貴重な工芸品など、これから先も受け継いでいきたい取り組みや沖縄への想いをご紹介します。



豊年祭の舞台「長者の犬主」で披露される神獅子による獅子舞

字の誇り
八重瀬町志多伯の
獅子加那志豊年祭



年忌のときにだけその姿を拝むことができる大迫力の志多伯の神獅子

沖縄県最大・最古を誇る「富盛の石彫大獅子」があることでも有名な沖縄県南部の八重瀬町。各字では今も盛んに、獅子舞や綱引き、棒術やエイサーなどのさまざまな伝統行事が行われています。中でも志多伯の「獅子加那志（しーし）がなし（し）」は、字の守り神である神獅子（かみじーし）による獅子舞で、無病息災を祈願したのがはじまりとされ、約300年もの歴史を誇ります。

沖縄戦によって一度焼失し、住民の手によって終戦1年目の昭和21年に復元。66年目の現在も同じ獅子頭を大切に守り続けています。復元された年を一年忌（うったてい）として捉え、年忌法要と同じ周期による年忌祭（にんちさい）、「獅子加那志豊年祭」を八月十五夜に開催しています。

300年続く獅子舞
「獅子加那志」を大切に継承

今後の展望

「今年の八月十五夜（9月30日・10月1日）には3巡目の一年忌が開催されるので、練習も今が追い込みです」と笑う神谷さん。今年はボリビア在住の神谷健さんの里帰りがきっかけで、昭和30年代の豊年祭演目の再演も期待されているそうです。さらに獅子舞や豊年祭の継承は、棒術や綱引きの保存・継承にも広がっており、「保存・継承、そして発展をめざして地域を見つめながら、世代と世代をつないで地域の和を保っていききたい」と熱く語っていました。



2度目の33年忌となった昨年の豊年祭に出演した志多伯のみなさん

伝統芸能が地域をつないでいるのね！



200年を経て復活した県内でも珍しい「からくり旗頭」旗頭の竿を上下させるとミルク神が鐘鼓を鳴らす



90分の大作として演じられる組踊「忠臣身替（ちゅうしんみがわり）の巻」

地域総出で取り組む 豊年祭

物資のない終戦直後は、獅子頭の材料となるデイゴの木に砲弾の破片が刺さって使えなかったり、米軍の残したパラシュート生地や、



八重瀬町志多伯
伝統文化保存会事務局
神谷武史さん

「志多伯の人々にとって神獅子は崇高な存在。例えば獅子舞の練習であつても年忌祭以外ではその姿を見ることが触れることもできません」と話すのは八重瀬町志多伯伝統文化保存会事務局長の神谷武史さん。豊年祭の実行委員として老若男女約50人のメンバーとともに、獅子舞をはじめ、地域の伝統文化の継承や保存に積極的に取り組んでいます。



八月十五夜の満月の下で豊年祭の舞台に熱心に見入る地域の人々